

「Revelation 啓示」クリティカルブックレビュー

多良見キリスト教会 永松博、永松九実子

●はじめに

翻訳およびレビューは、永松博、永松九実子の共作である。また、翻訳が主となっている。

●レビュー

『新約聖書神学事典』(熊澤義宣ほか、教文館1991)によれば、啓示とは、「本来は覆いかくされている神の秘義が現されること」である。「啓示」と訳されるギリシア語(アポカリュプシス)が、「覆いかくす(アポカリュプトー)」+否定の接頭辞(アポ)の動詞(アポカリュプトー)に基づいていて、「覆いを取りのぞく」すなわち、「現れる」という意味となるわけである。

『A Baptist's Theology』の第一章「Revelation(啓示)」の著者であるW・L・ヘンドリックス(以下、ヘンドリックス)も、「啓示」とは、神ご自身が自分を現すためにカーテンを開けるようなことであると述べている。けれども、彼は、啓示について語る前に、まずキリスト者の信仰における5つの前提(Assumptions)からはじめている。

【キリスト者の信仰における5つの前提】

1) 神を信じるといふ基本的な前提

有神論者ということ。反対には、無神論者(Atheists)がいる。

2) 神が何らかの方法で突き破ってこの世界にこられるという前提

私たちの世界に突き破ってこず、何もしない神を礼拝するのは、人にとって良いことでない。

3) 人は神が突き破ってこられたことを受け取り、理解することができるという前提

反対には不可知論者がいるが、この想定によれば不可知論者も無神論者と同じである。

4) しかし、人は神の全てを知ることはできないという前提

イザヤ書 55章 8~9節

「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。

天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。」

この言葉には、神と人には特別な違いがあるという理解がある。

5)4)にも関わらず、神によって明かされたことは間違いなく神の基本的性質を現わすとの前提
神の基本的性質は、み言葉の中に現わされており、最大にイエス・キリストの中に現わされて
いる。(神は愛であり、嫌悪ではない。神は被造物に関わられる方であり、無関心な方ではな
い。)

私は、この 5 つの前提を読むだけでも、己の信仰の前提が言葉化され、整理されるという意味
で価値があったと感じた。

その他に、特に興味深かったのは、4)の中で、著者がバプテストの牧師たちを批判する部分で
ある。ヘンドリックス曰く、「多くのバプテストの牧師たちは、今日、有限なる人間が無限なる神を完
全に知ることが出来ると思ひこんでいる」と言って、米国南部バプテスト連盟の牧師たちを批判し
ているようなのである。私は、彼が批判するところの「バプテストの牧師」像とはどのような像なの
だろうかと考えさせられた。米国南部バプテスト連盟の牧師たちとは何たるかをよく知らない私が、
あえて文脈からのみ推測して語ることがゆるされるとするならば、それは「自己を絶対化している
牧師」の像であり、それは「神の名のもとに、すべてを断言する牧師」の像ではないかと考えた。も
っと言えばそれは、「神について、わからないと言って沈黙することができない牧師」の像かもしれ
ないと考えた。私自身が問われたように感じた。

続いて、啓示に関して具体的に語られる。ヘンドリックスは、啓示の主体である神が、どのよう
に覆いを取り除いたのかについて、1) 顕現 (manifestation)、2) 霊性 (inspiration)、3) 照明
(illumination) という三つの神学的トピックスを挙げる。そして、彼は、これを「啓示的三和音」と呼
ぶ。

1) 顕現

ヘンドリックスは、顕現について「神が私たちの時間や場所に入ってこられ、特別な舞台上で御意
志を語るという特別な御業のこと」と説明し、顕現を通して神はご自身がどのような方である
かを啓示するという。神は、多くのものや人を用いられ、神聖な道への気づきをお与えになる。実
際に歴史的に神が介入されたのは、旧約における出エジプトであり、新約聖書におけるキリストの
出来事とする。神の顕現は、私たちの歴史の中に表され、その神の意志やメッセージを受取る人
たちが理解できる方法で表されるところに特徴がある。つまり、旧約、新約と一貫した「贖い」の御
業を遂行された神の歴史への介入こそが、神とはどのような方であることを示しており、今を生きる
私たちにも救いへと導いてくださる神であることを証しているということなのだ。

2) 霊性

しかし、この事柄だけでは、神とはどのような方かを知るには材料が足りない。啓示が顕現だけ

であれば、神はかつて聖書の歴史においてのみ人類に関わっておられたと理解するにとどまる。そこで、今を生きる私たち、ひいてはすべての人間が神の顕現を受け取るに必要なものがあり、それが二つ目のトピックである「霊性」(inspiration※靈感を受ける)である。「霊性は、適切な人に正しく受け取られ、記録され、釈義され、そして、神の完全な顕現の記録を伝えるようにする神の導きである。」とする。つまり、聖書のことである(第2テモテ 3:16、第二ペテロ 1:21)。その聖書は、神の完全なる靈感を受けた者たちが書いたから、完全な書物であるというのではない。大切なのは、聖書が書かれたという結果ではなく、聖書が成立するまでの課程にこそ神の働きかけとしての啓示があるということなのだ。だからこそ、すでに完成した聖書の一言一句を持って「聖なる神の言葉」とするのではなく、聖書成立までのプロセスを吟味しながらそこに脈々と流れる神のメッセージを多角的にくみ取っていくことが重要であろう。そうすると、ヘンドリックスが述べるように「多様な聖書解釈と共に生きることの重要性」が発生するのだ。ただし、ヘンドリックスは、聖書の絶対的な結論を出すことに距離を置きながらも、聖書をどう読むかのルールがあると述べる。それを「解釈学(hermeneutics)」として説明する。その原則は、1)文脈の中で読むこと、2)どのような文学的背景を配慮する(例えば、詩的か、史的か、書簡かなど)こと、3)歴史、背景、古代聖書時代の習慣についての理解を深めるために注解書を用いる、などである。この解釈学を用いて、聖書がどのように成立したかの過程を重んじつつ聖書テキストに触れることへと導いている。やはり、一字一句を無批判的に神の言葉とするのではなく、その言葉の背後にあるプロセスを重んじる聖書の読み方である。

3) 照明

さて、二つの項目が出てきたが、私たちが神の歴史おける贖いの歴史(顕現)と、これらの説明の記録である聖書(霊性)を持っているだけで、神の啓示がすべてかというそうではない。大切なのは、この神の啓示、神の力そのものが、生きて私たちの只中で力を発揮することである。それで三つ目の「照明」が必要となる。照明とは、「救いにおける靈感を受けた記録を通して、神の理解をあらゆる年齢の人間に与える神の行為」であり、つまり、聖霊が御言葉を生きたものとならしめ、私たちの経験に介入され、神の国に入るために私たちと伴ってくださることである。ここで注目したいのは、「救いにおける靈感を受けた記録を通して」というのは、つまり聖書を通してのみ神ご自身が人々に介入され、ご自身を表されるということなのだ。聖書本文を完全に離れたところで、神が独自に人間に救いの働きをなさると考えるのは危険ということであろうか。ヘンドリックスはそれをダイヤモンドの例えによって説明する。聖書は数学のように答えが決まっているものではなく、ダイヤモンドのようにそこに光を照らした瞬間に様々な方向へと光を放っていき、その光を捕まえることはとても難しい。聖書を通しての神の自由な働きこそが、「照明」の意味に込められていることだろう。つまり、人が恍惚状態になることによって神の意志を悟り得るような、自由気ままな神秘主義によって神の啓示を受け取るのではなく、1にも2にも聖書を読み、そこに自由に働かれる聖霊によって神の啓示があるということだ。

しかし、中心には必ず聖書があると言いつつも、ヘンドリックスは「聖書崇拜」に陥らないように

とも警鐘を鳴らす。御言葉を礼拝することへの危険性を踏まえた上で、結局、聖書は啓示の一部であることを理解しなければならないとする。この聖書との距離感が難しい。聖書は崇拜対象ではないが、権威づけられている。なぜなら神の言葉だからである。

権威 (Authority)

ヘンドリックスは、次にこの「権威 (Authority)」の問題に触れる。

イエスは、当時、多くの宗教リーダーたちとの対立の中で、権威についての質問に直面していた。このことで最も切れ味のある話は、ヨハネによる福音書 8 章にある。宗教リーダーたちがイエスの権威について質問してきたとき、イエスは、彼の背後におられる神と自分が同等であることを指示された。私たちはここから始めなければならない。キリスト者の信仰における権威とは、御言葉によって明らかにされた三位一体の神であり、受け継がれてきたものの中に伝えられているものであり、経験の中で現実になるものである。

私たちのすべては必然的に、時代によって、また私たちの生活環境によって形づけられる。私たちは受け継いできたものがあり、文脈がある。たとえ、バプテストの話を何一つ知らなかったとしても、私たちの家の教会やわたしたち自身の家族に何が起こったかは知っている。私たちはバプテストの伝統について、この現代においてバプテストとは誰なのかが形づけられていることのために、学ぶ必要がある。

私たちの権威についての教義の最後の部分は、私たちの教会生活や個人的な生活での経験に及ぶ。私はバプテストが大きな尊敬と豊かな慰めをもって、一人の者が所属している罪救われた共同体である、教会にきくことを励ましたい。教会に参加する生き方とは、神が個人に何を語られたかではなく、教会 (共同体) に何を語られたかにもっと調和する生き方である。これは常にケースではなく、絶え間ない教会への反論の連続の中で見出す者たちは、慎重に彼ら自身を評価することを欲するだろう。

ヘンドリックスは、啓示についてその他の宗教においてどのような捉え方があるかを紹介しながら、自分たちが自己絶対的に陥らないための 4 つの適切な態度について説明する。

一つ目は、保守的な態度であり「彼らはすべて悪」(They-are-all-of-the-evil) と考える。この態度の理由は、私の信仰こそが正しい、なぜならこれは神からきているからだと考えているからだ。私の信仰と違っているから、彼らは悪魔に違いないと考える。これでは、情報を受け入れることのできない立場になる。こうなるともちろん、他の宗教の人々と対話することを許す視点にはならない。初期のバプテストは、違うキリスト教の宗派に対してさえも、この「彼らはすべて悪」という視点を持っていた。多くの敵意と、批判、そして不幸 (悪) が生じるだろう。苦い実を避けるこの最初の視点によって、少しは得るものがある。

二つ目の世界にある宗教を見る見方についての態度とは、「階段を上る」(Stair-step) アプローチと私は呼んでいる。このアプローチは、一つのビルにある階段を例にした基準に従って、世界の宗教をランク付けする態度である。かわいそうな、原理主義的な宗教と呼ばれる彼らは、往々にし

てこれらの比較的な議論に答えるにはあまりにも準備が整っておらず、通常は階段の底に巻きついています。最上階に達する人とは、階段を作った人間であり、この比較のルールを作る人間である。この比較する態度は、通常傲慢さを表し、異教徒の人たちとの対話に開かれない。

三つ目の他の宗教を見る見方についての態度とは、それぞれの宗教の部分を選び抜き、それらと一緒にすることができるかどうか挑戦してみる。そうすると、それを選び抜いた者が多くの信仰の部分を含む、スーパー信仰を作り上げることが出来る。私はこれを三つ目のアプローチ「シチュー鍋」方法と呼ぶ。以前の世代は、冷蔵庫を掃除するために、残っているものをすべて使い切ろうとする。これらのシチューは、往々にして消化するのに大変だった。「シチュー鍋」の多様な宗教に対するアプローチ方法の問題は、多くあった。すべての宗教は同じことを言いはしない。それぞれの宗教にはそれぞれの独自性がある。すべての宗教は、それぞれの土壌で成長する。東の宗教（ヒンズー教、仏教、神道など）は、西の宗教（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）とは違う世界観を持っている。折衷（選び抜き）宗教の結果は、通常、誰も喜ばせない。

四つ目の態度は、「傾聴する愛」と呼ばれるものである。愛をもって聞くという態度は、言葉の通りを意味する。それは多宗教に耳を傾ける。保守的態度でなく、他の人の観点を理解しようと努める。これは、自分自身の信仰を知っていなければならぬし、他者の信仰についても知っていなければならないことを意味する。傾聴する愛は、双方の視点の間で丁寧な対話が要求される。それから、キリスト者は、神との対話から自信を持って離れなければならない。私は、傾聴する態度に対してすべての異論を聞いてきた。このような異論である。「しかし、私は知的議論には勝たなければならない。そうしなければ、神が悪く見えてしまうでしょう。」とか、「自分が自分の芝生に居ない時は、宗教的議論によって脅威を感じる。」「わたしは他の信仰についてなんて何一つわからない」とかう異論である。これらの議論に名をつけることは、これらに答えることである。神の栄誉は、私たちの議論によって縛り上げられることはない。もし、あなた自身の信仰が安定しているならば、あなたを脅威にさらすような「芝」はどこにもありはしない。他者から学び、他者について学ぶことで、あなたは、前向きな信仰の証しをすることができる。

ヘンドリックスは最後に、宗教間対話において、多宗教とも一致できる部分があるという。それは、倫理部分においてである。ほとんどの宗教は、命を尊重したいと欲しており、世界を保ちたいと欲している。私たちはこれらの賛同できるポイントから始めなければならない。私たちは戦争によって命を無駄にするような無意味さや自然の資源を卑しく使うことを根絶することに協力しなければならない。この友好的でエコに関する協力は、すべて協力したものにキリスト教的救いを十分にもたらすものではない。しかし、これらの協働は間違いなく人道支援となり、この星を救う手伝いになる。これらの態度と行動において、まさしく神は賛美されることだろう。どの宗教も、最善な証明は、知的な議論の中には見出されず、倫理的な行為の中に見出される。クリスチャンは神は正義と愛の神であると信じている。クリスチャンのために、これらの信仰を強固にする最善の方法は、愛し、義なる存在になることである。私たちは確かに、自分の実によって知らなければならない。これ以上に、デモンストレーションとなり、私たちの信仰の証明を与える最善の方法はない。しかし、疑問は残る。「クリスチャンではない人々に何が起こるのか？そして、キリストを知らない人々にも同

様に何が起こるのか？」古き二重の答えは、いまだうまくやっていくスタンダードな方法なのだ。すべての人々は彼らの持つ光によって裁かれる。それはこの世と人類を裁く神である。この暫定的な答えは、伝道と使命への私たちの責任に勢いを与える。私が見出した答えは、どこであれ、真理のあるところ、善意のあるところ、美しさのあるところは、直接的であれ、間接的であれ、必ず神から来ているということである。クリスチャンは、キリストにのめり込んでそこだけに集中しすぎているように見える。キリストは、この方を通して明確に神を見ることのできるただ一人の方である。これがキリスト教の性質であり、私が共有しているものである。はじめに神、終わりに神、神はカーテンを開けて誰が神であるかを表され、私たちが一体何者であるかを表された。この啓示のドラマは、面白いショーである。

●最後に

レビューの後半は、自己翻訳をそのまま載せることとなった。神がご自身を表す啓示について、どのように理解すべきか牧会の現場において葛藤していたが、やはり重要なものは「聖書」であること、そしてその聖書の読み方に絶対はない事、啓示によって自己絶対化に陥るのではなく、対話に開かれた謙遜さが重要であることを学んだ。また、啓示と黙示が同じ言語であるように、終末的思想をどのように含んでいるのかも自然と興味がわいたので、今後啓示における終末論なども研究していきたいと思われた。